ホスピタリティとはなんだろう

技術コンサルタント　田口重久

筆者は技術コンサルタントとして 26 年間にわたり海外での水力発電や灌漑プロジェクトに携わってきており、転勤や出張などで通算約 13 年間の海外生活をしている。一ヶ月以上滞在したことのある国は、インドネシア、マレーシア、ヨルダン、イラン、ネパール、シリア、ペルー、ケニアなどの主に開発途上国である。

東南アジアと中東では人種も言葉も考え方も大幅に異なっているのはいうまでもない。しかしながら、彼らの仲間として認知されてくるに従い、人種は違えど彼らの持つホスピタリティの総量にはあまり差がないのではないかと思うようになった。ホスピタリティとは人間が元々持ちあわせているものであり、その総量は民族による相違よりも、個人による相違の方が大きいものなのであろう。

まず、筆者が最も長く滞在したインドネシアの例を挙げて説明しよう。

インドネシアの総人口の数パーセントを華人(現地国籍をもつ中国系の人達)が占めており、彼らがインドネシア経済の中核を担っているゆえ、中産階級以上が多いとともに、商店や事務所などで実際の人口比以上に我々の目に触れる機会が多い。

インドネシアは「微笑みの国」とトラベルブックなどには書いてあるとおり、現地に行

ってみると実際どこでもいつでも誰からでも微笑みが返ってくる。エトランゼにとって、この微笑みはとても心やすまるものである。

　またインドネシア人たちはパーティーが大好きで、知己同士を紹介しあうことで人間関係の輪を広げている。結婚披露宴からはじまり誕生パーティーまで、招待状が飛び交う。また、われわれ外国人がかれらの自宅を訪問することもとても喜ばれる。

　プリブミ（非華人）は表面上、人なつこく、親切で「人が良い」ように見えるが、もう一歩彼らの中に踏み込むことは余り歓迎されていないように思える。そこには日本人とよく似た「よそ者は仲間に入れない」という考えがあるようだ。この障害を乗り越えてしまえばわれわれ外国人といえども彼らの家族の一員と認知されるようになり、「よそ者扱い」されなくなる。

　一方、華人社会を覗くと、初対面では我々に対しての微笑はなく、ぶっきらぼうな上に最初は我々を「危険人物」と認知するためか敵意まで感じることがあり「人が悪い」と感じる事が往々にしてある。しかしながら、華人社会に溶け込んでしまうと、この「ぶっきらぼう」は我々に対する敵意から生まれてきているものではなく、華人文化の一つであることがわかる。さらにかれらが我々を信用すると、プリブミよりも親身になって色々な相談に乗ってくれる。「本当に困った時は華人の方がプリブミより頼りになる」とはプリブミの友人の言葉であった。日本企業がインドネシアでプリブミより華人系の企業と合弁するのは、華人の持つ経済力のみならず、このような華人の行動様式によるものではないだろうか。

◆

次に、話は西に進んで中東に入る。

約二十年前に勤務先の同僚（日本人）がヨルダン川東岸でダム建設のために地質調査をしていた。プロジェクトサイトには数軒のちいさい農家があり、かれらはその一軒の軒先を借りて昼休みを取っていた。この家の主は農夫ではあるが英語を話せ、何ヶ月も調査が続いた後には調査団員とすっかり親しくなった。この家には適齢期の娘さんが数人いて、休みの日には団員を招いてバーベキューを一緒に楽しんだりしていた。このパーティーが数回続いた後、羊の数が毎回減ってきて、残り数頭とロバだけになったことを同僚の一人が気づき、ついにはロバ肉を食わされたり、娘を押し付けられたりするのではないかと心配するがあまり、それからはパーティーには近寄らないようにしたということであった。

アラブ人やイラン人はずうずうしく狡猾で人が悪いといわれているが、実際に長く付き合って信用を得ると、実に親切できちんとした人生哲学を持っている人が多いように感じる。ただし「とっつきの悪いこと」と「仕事と金銭はホスピタリティとは別もの」であることを忘れてはならない。

インドから西のイスラム社会では、男女が混じって公式なパーティーをすることはないと聞いている。イスラムの教えで「男女七歳にして席を同じゅうせず」ということになっているからであろう。しかし、これは敬虔なムスリムが主催する場合の話で、あまり敬虔でないムスリムが集まる非公式なパーティでは酒も出るし男女が交じり合っているのが普

通である。出席者には美人が多いのだが、日本人はなかなか仲間に入れてもらえないのが普通であり、残念である。

ヨルダン人の友人の話では、トルコが中東に進入してくるまではアラブでも男女が交じり合って食事をするのが普通であったとのことであった。この家族は極めて敬虔なムスリムなので、我々が訪ねていった際にお茶やお菓子を持ってきてくれたのはかわいい坊やであった。

一方、イラン人であるテヘランの友人宅ではしばしば週末にパーティを開いており、既婚未婚をとわず若い男女が集まってくる。彼女たちは頭から爪先までを覆う黒いヘジャブを着ているが、家に入ってヘジャブを取ると、その下に着ている華やかな色合いのミニスカートやミニドレスが筆者の目を楽しませてくれた。イスラムの本家本元のアラブではきちんとイスラムの教えを守っているのに対して、イスラム革命以前には自由であったイランでは戒律を守ろうという気があまり多くないためであろう。

中近東諸国でかれらと付き合って分かったのは、表面的には非常にドライなのだが、内面は日本人以上にウエットなところがあるということであった。◆

表面上の「人の良さ」、少し踏み込んだところの「人の良さ」、内部に入り込んだところの「人の良さ」を合計した値は民族によってそれほど異なるものではないような気がする。

彼らを自分に置き換えてみると、筆者が日本人であるゆえか、性格が悪いのかは分から

ないが、彼ら以上のホスピタリティを持っていると言える自信はない。ひょっとすると、都会に住んでいる日本人が世界中で一番ホスピタリティに欠けているのではないだろうか。ホスピタリティに欠けているのは日本人の中でも筆者だけなら良いのだが……。

アメリカ人やヨーロッパ人の行動様式については映画やテレビに沢山の情報があるため理解しやすいが、この種の情報が少ない東南アジアから中近東にかけては、かれらの行動が我々に誤解を生じさせやすい。また情報が少ないために東南アジアから中東の人達の行動様式が我々の目に奇異に映ることもある。さらに、かれらの行動様式についての情報はヨーロッパ人の目を通して我々に伝わってくることが多いために、事実が歪曲されていることがけっこうある。

「目には目を」というイスラムの掟は、本来「目を潰されたら、相手の目を潰すだけで終わりにしなさい。それよりも金銭で円満解決を計る方が良い」ということである。我々が理解しているような「絶対に復讐をしなくてはならない」ということとは正反対の意味を持っている言葉なのである。「剣かコーランか」という言葉もヨーロッパ人達が捏造したものである。というのはイスラムでは入信を強要してはならないことになっているからである。

このようなヨーロッパ人の中東人に対する誤解の背景として、千年近くにわたる十字軍が全て失敗したことと、産業革命までの中東地域の経済的文化的繁栄に対する劣等感があるのではないか。アラブ人とトルコ人がアレキサンドリアの図書館を二千年以上も維持管

理していなかったならば、ギリシアのソクラテスやプラトンなどの著書も残っていなかった。それにもかかわらず、いまだにヨーロッパ人は「アラブ蔑視」しているのである。

西洋文化の元となったギリシア・ローマの古典を守り育ててきたホスピタリティへの賞賛はアラブ人とトルコ人に捧げるべきなのかもしれない。

（終）